

Title	拒否に対する感受性とストレスコーピングとの関係の検討
Sub Title	
Author	小川, 万理子(Ogawa, Mariko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.64 (2007.) ,p.157- 160
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成18年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000064-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

有していたといえる。井上のいう宗教の負の要素を含まず、日常生活を範疇とし、科学とも悖らない世間的な道徳を主眼とする儒学の性格に、井上は今後の徳育を構想していく上での有用性をみていたのである。

おわりに

以上のように、井上は「儒教復活論」興隆の影響もある中で、自らの儒学理解・認識を示していたが、井上にとって儒学は捉えようによっては今後とも有用な教義として理解され、その有用性は徳育と強い結び付きをもって認識されていたといえよう。これ以降井上が「国民道徳論」を語っていく中で、井上の儒学観でとりわけ注目しておきたいのは、儒学は時代の変化によってその内容は修正される、あるいはすべきものであると考えていた点である。というのも、具体的な検討については次稿以降での課題となるが、儒学をその時々々の時勢を鑑みて再解釈し、その時代に相応しい内容に改変可能であるとする井上の論理は、実際彼の「国民道徳論」において援用されていくものだからである。

本年度の研究では、井上の儒学理解・認識について徳育との関連で考察を進めてきたが、ここで明らかとなった井上の儒学観が、自らの「国民道徳論」において、具体的にどのように反映し、応用されていったのかについては、今後の課題として稿を改めて論ずることとしたい。

* 幅の都合上、本稿では引用の出典を明らかにするにとどめ、注記は省略した。

拒否に対する感受性とストレスコーピングとの関係の検討

小 川 万 理 子

拒否に対する感受性とは、他者から拒否されると不安を伴って予期し、また拒否をすぐに知覚して過剰反応しやすい傾性をさす (Downey & Feldman, 1996)。Downey & Feldman (1996) は拒否についての予期とそれに伴う不安・懸念が拒否に対する感受性の中核だとし、これらを測定する Rejection Sensitivity Questionnaire (RSQ) を開発した。すなわち、両親・友人・恋人といった他者から拒否されると予期しやすく、なおかつそれについて不安を強く感じやすいほど拒否に対する感受性が高いとみなされる。それ以降の研究により、対人関係においてストレスフルなイベント (対人ストレス) を経験した際、拒否に対する感受性がより高い者ほど健康が害されやすいことが示唆されている (小川, 2004)。

この拒否に対する感受性の高い者の示す傾向には、彼らが対人ストレスにどう対処しているか、すなわちコーピングの問題が関わっている可能性が報告されている (小川, 2005)。しかしながら、個人の傾性に加えてストレスの性質の影響も検討した研究では、個人傾性とコーピングとの関連がストレスの性質によって異なることがあるとされている (e.g., O'Brien & DeLongis, 1996)。これを踏まえ、拒否に対する感受性と対人ストレスへのコーピングの選択との関連が相手との親密性および重

要性によって異なるのかを検討することを目的とした質問紙調査を実施し、日本パーソナリティ心理学会第 15 回大会にて発表した（発表題目：拒否に対する感受性と対人ストレスへのコーピングとの関連）。以下にその内容をまとめる。

方 法

測度

1. 拒否に対する感受性の測定

日本語版拒否に対する感受性測定尺度（本多・桜井，2000）を用いた。これは、RSQ の中の日本人にとって馴染みのない項目（場面）に修正を加えた上で翻訳された尺度である。18 の対人場面（例：友人を真剣に怒らせた後でその友人に話し掛ける）から構成されており、各場面において拒否に対する心配（相手から受容/拒否されることについての不安・懸念）と予期（相手に受容/拒否される可能性）が測定される。なお本研究では、場面をより明確に提示するために主語の位置を変える等の変更を一部に施した上で使用した。心配について「全く心配でない（1点）」から「非常に心配である（6点）」までの6件法で、予期（逆転項目）について「必ず断られる（1点）」から「必ず受け入れられる（6点）」までの6件法で回答を求めた。各項目得点は、心配得点と予期待点とを掛け合わせることで算出した。

2. 対人ストレスへのコーピングの測定

対人ストレスの指定と親密性および重要性の測定：まず、最近3ヵ月間に経験した二者間のやりとりの中で最もストレスを感じたイベントをリストの中から選択するよう求めた。このリストは、対人・達成領域別ライフイベント尺度（大学生用）短縮版（高比良，1998）を参考に作成された。該当する経験がない場合には、経験したものの内容を記述するよう求めた。本研究ではリストを用いて二者間のやりとりが指定された回答を分析対象とした。次に、指定したストレスに含まれていた相手について、それまでの親密性と重要性の程度を回答するよう求めた。親密性について「全く親しくなかった（1点）」から「非常に親しかった（6点）」までの6件法で、重要性（逆転項目）について「非常に重要だった（1点）」から「全く重要ではなかった（6点）」までの6件法で回答を求めた。

コーピングの測定：Tri-axial Coping Scale-24（神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野，1995）を用いた。これは肯定的解釈（例：悪いことばかりではないと、楽観的に考える）、カタルシス（例：誰かに話を聞いてもらい、気を静めようとする）、回避的思考（例：嫌なことを頭に浮かべないようにする）、気晴らし（例：スポーツや旅行などを楽しむ）、計画立案（例：原因を検討し、どのようにしていくべきか考える）、情報収集（例：既に経験した人から話を聞いて参考にする）、放棄・諦め（例：自分では手におえないと考え、放棄する）、責任転嫁（例：自分は悪くないと言いのがれする）というコーピング方略、各3項目から構成された尺度である。なお本研究では、各項目の語尾を現在形から過去形に変更した上で使用した。先に指定したストレスに対するコーピングについて「まったくそうしなかった（1点）」から「とてもよくそうした（5点）」までの5件法で回答を求めた。

手続きと調査対象者

2006年7月の大学・専門学校での講義時間中、協力が強制ではない旨を説明した後に無記名式の調査を実施した。116名（男性42名、女性68名、不明6名；平均18.8歳、SD=1.1 [不明7名]）を分析対象とした。

Table 1. 親密・非親密毎の拒否に対する感受性とコーピングとの相関係数

	肯定的解釈	カタルシス	回避的思考	気晴らし	計画立案	情報収集	放棄・諦め	責任転嫁
非親密 (N=27)	-.15	.25	.14	.17	-.17	-.09	.13	.09
親密 (N=89)	-.15	-.01	-.08	-.26*	-.16	-.05	.24*	-.05

* $p < .05$

Table 2. 重要・非重要毎の拒否に対する感受性とコーピングとの相関係数

	肯定的解釈	カタルシス	回避的思考	気晴らし	計画立案	情報収集	放棄・諦め	責任転嫁
非重要 (N=36)	-.24	.06	.05	-.03	-.18	-.06	.17	-.10
重要 (N=80)	-.10	.04	-.06	-.23*	-.16	-.08	.23*	.02

* $p < .05$

結果と考察

拒否に対する感受性とコーピングとの関連が親密性および重要性によって異なるのかについて、以下の方法により検討した。まず親密性については、「全く親しくなかった」「あまり親しくなかった」「どちらかといえば親しくなかった」を非親密群、「どちらかといえば親しかった」「やや親しかった」「非常に親しかった」を親密群とし、群毎に拒否に対する感受性と各コーピングとの相関係数を算出した (Table 1)。その結果、親密群において拒否に対する感受性と気晴らしとの間に有意な負の相関 ($r = -.26, p < .05$)、放棄・諦めとの間に有意な正の相関 ($r = .24, p < .05$) が示された。次に重要性については、「全く重要ではなかった」「あまり重要ではなかった」「どちらかといえば重要ではなかった」を非重要群、「どちらかといえば重要だった」「やや重要だった」「非常に重要だった」を重要群とし、群ごとに拒否に対する感受性と各コーピングとの相関係数を算出した (Table 2)。その結果、重要群において拒否に対する感受性と気晴らしとの間に有意な負の相関 ($r = -.23, p < .05$)、放棄・諦めとの間に有意な正の相関 ($r = .23, p < .05$) が示された。

以上の結果から、親密だった相手との間でストレスを経験した際に、拒否に対する感受性が高いほど気晴らしを選択せず、放棄・諦めを選択する傾向にあることが明らかとなった。また重要だった相手との間でストレスを経験した際に、拒否に対する感受性が高いほど気晴らしを選択せず、放棄・諦めを選択する傾向にあることが示された。しかしながら、本研究には対象者数が少ないという限界がある。この点を解決し、さらに対人ストレスの性質をより詳細に捉えることが可能な測度を用いて検討を積み重ねていくことが今後の課題である。

引用文献

Downey, G., & Feldman, S. (1996). Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1327-1343.

- 本多潤子・桜井茂男(2000). 日本語版拒否に対する感受性測定尺度の作成 筑波大学心理学研究, 22, 175-182.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二(1995). 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24)の作成 教育相談研究, 33, 41-47.
- O'Brien, T. B., & DeLongis, A. (1996). The interactional context of problem-, emotion-, and relationship-focused coping: The role of the big five personality factors. *Journal of Personality*, 64, 775-813.
- 小川万理子(2004). 拒否に対する感受性とライフイベント、ストレス反応との関連(2) 日本心理学会第68回大会発表論文集, 955.
- 小川万理子(2005). 拒否に対する感受性がストレスコーピングの選択に及ぼす影響 人間と社会の探究(慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要), 60, 105-112.
- 高比良美詠子(1998). 対人・達成領域別ライフイベント尺度(大学生用)の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, 14, 12-24.

オンライン政治討論の熟慮民主主義的可能性に関する研究

——内容分析によるアプローチ——

金 鐵 鎔

インターネットを利用した政治討論が増加するにつれインターネットが政治討論と市民参加のための新しい空間を提供するであろうという期待がもたれている。インターネット・コミュニケーションを通じて政治参加の機会が増え、政治コミュニティが再構成され、公的な出来事に対する関心が増えている事例を列挙しながら、インターネット討論の政治的効果に対し肯定的見解を示す研究者もいる(例えば、DiMaggio, Hargittai, Neuman, & Robinson, 2001; Hill & Hughs, 1998)。特に、インターネット上で画期的に増加している政治討論を目撃しながら、これまで主に理論的な水準で議論されてきた熟慮民主主義(deliberative democracy)の理想が現実的に実現されうるという期待も提起されている(Rhee *et al.*, 2005)。

本研究は、実際のインターネット電子掲示板の政治討論が熟慮民主主義に寄与する可能性を持っているかを、内容分析を通じて実証的に検討することをその目的とする。

インターネット電子掲示板の政治討論の熟慮民主主義的可能性に関心を持つ本研究は、熟慮民主主義が個人性(individuality)と市民性(civility)という二つの次元で構成されているというPark(2000)の研究に着目して、個人性と市民性の二つの次元でインターネット電子掲示板の政治討論の熟慮民主主義的可能性を評価しようとする。具体的には、Cappella *et al.*(2002)が、熟慮の個人性だけでなく市民性も含む尺度として提案した論拠レパートリー(argument repertoire)と討論に臨む態度変数として討論相手に対する言葉遣いを主要変数とする。このような変数を用いてインターネット電子掲示板の政治討論がどのような水準で行われているのかを、Yahoo 掲示板の靖国神社参拝問題に関する討論掲示板を事例に分析を行った。

本研究の主な結果は次のとおりである。

まず、メッセージに根拠を与える行動を見ると、特定相手のないメッセージが特定相手に対するメッセージより、統計的に有意により多くの根拠レパートリーを含んでいた。